

養護施設児の学業不振に関する研究

或養護施設児の事例研究(2)

研究第6部 権平俊子

I はじめに

学業不振の実態とその改善に関する研究「第1報 養護施設児の算数学力の分析」をプロジェクト研究で行い第23集で報告した。また或施設の入所児につき、算数科の学力不振につき事例研究を行い「養護施設の学力不振に関する研究—或養護施設児の事例研究—」を第23集に報告した。そこで報告した、養護施設入所児の1年後の経過を追って、更に事例研究を行い算数科の学業不振の実態を探ってみたいと考えた。

II 目的

徳島県養護施設児に対して、算数学力診断テストを1986年と1987年に行い、その結果につき検討を加えた。その中の1養護施設の好意で、入所児につき詳細な資料が得られたので、1986年度に事例研究を行って第23集に報告した。徳島県養護施設、保母・指導員合同ケース研究会(対象とした9養護施設の保母・指導員により構成されている。)では、収容児の学業不振、特に算数科の学業不振の改善の必要を感じて、各施設で1986年より、岸本裕史氏の方法^(註1)により、算数科の学習指導を行っている。

研究対象の養護施設に於ても、同じ方法で算数科の学習指導を行っている。1986年に事例研究を行った、同じ子どもにつき、更に1年後の経過を追って事例研究を行い、算数科の学業不振に焦点をあて検討し、その背景等を探り、今後の算数科の学業不振改善のために役立てたいと考えている。

註1 文献7参照

III 方法

徳島県内1養護入所児、1986年に算数学力診断テストを行って、現在も施設に在所している者、小学生16名、中学生9名、計25名(男17名、女8名)につき、入所年

齢で乳児院から入所した者(A群)3歳以下(B群)3歳1か月—6歳(C群)6歳1か月以上(D群)に分けて、1986年に行った養護施設児各学年の算数学力診断テストの全領域の平均と、1987年に行った各子どもの算数学力診断テスト^(註2)の結果の全領域と比較し、1986年の報告と同様に10%以上プラスの場合(+)10%以下プラス、マイナス(±)10%以上マイナスを(-)として、本人の前年度と比較した。

算数科の学業不振の背景となる、要因を探るために、次のような項目につき、各対象児の担当施設職員にアンケート用紙に記入してもらった。

- ①対象児の性格(表1参照)
- ②施設内の行動(表2参照)
- ③各対象を施設内で扱う方針があれば、20項目の中から、3項目だけ選んで記入してもらった(表3参照)
- ④本人が非行、反社会的問題行動を過去にしたことがあったか、現在しているか(表4参照)
- ⑤本人が非社会的問題行動を過去にしたことがあったか、現在しているか(表5参照)

以上の結果と算数科の学校に於ける成績評価を参考に加え、知能指数なども含めて比較検討して、事例研究を行う。

註2 算数学力診断テストは、算数科の指導要領に基いて、数と計算、量と測定、図形、数量関係の4領域別に作成したものである。4領域の平均全領域としてみる。例えば1年生用のが全領域で100%出来れば、1年生の課程を全部習得していると、判断できる。実施時期が10~11月のため、小学生については、1年生用のを他学年には該当学年の1年下の学年用のを、中学生には全員に6年生用のテストを実施した。

IV 結果及び考察

1. 対象児

徳島県内1養護施設入所児で昨年算数学力診断テストを行った者25名、対象児の内訳は、小学校在学児16名(男10名、女6名)中学在学児9名(男7名、女2名)

表1 性格特徴

	1.	2.	3.	4.	5.	
	非常に	大体	普通	少し	非常に	
1. 明るい	----- ----- ----- ----- -----					暗い
2. すなおである	----- ----- ----- ----- -----					強情である
3. おおらかである	----- ----- ----- ----- -----					物事を気にしすぎる
4. 意志が強い	----- ----- ----- ----- -----					意志が弱い
5. 独立心がある	----- ----- ----- ----- -----					依頼心が強い
6. きちようめんである	----- ----- ----- ----- -----					だらしがない
7. やる気がある	----- ----- ----- ----- -----					やる気がない
8. 目立たないことでもする	----- ----- ----- ----- -----					目立つことが好き
9. 根気がよい	----- ----- ----- ----- -----					あきっぽい
10. 気分が安定している	----- ----- ----- ----- -----					気分がかわりやすい
11. 感情表現が豊かである	----- ----- ----- ----- -----					感情表現が乏しい
12. がまん強い	----- ----- ----- ----- -----					かっとなりやすい
13. 人なつこい	----- ----- ----- ----- -----					人みしりする
14. 甘える	----- ----- ----- ----- -----					甘えない
15. 思いやりがある	----- ----- ----- ----- -----					思いやりがない
16. 協調性がある	----- ----- ----- ----- -----					協調性がない

表2 施設内での様子

	1.	2.	3.	4.	5.	
	非常に	大体	普通	少し	非常に	
17. 扱いやすい	----- ----- ----- ----- -----					扱いにくい
18. 気持ちを通じる	----- ----- ----- ----- -----					気持ちを通じない
19. 人に好かれている	----- ----- ----- ----- -----					人に嫌われている
20. 弱いものにやさしい	----- ----- ----- ----- -----					弱い者をいじめる
21. リーダーシップがとれる	----- ----- ----- ----- -----					リーダーシップがとれない
22. 決めたことを守る	----- ----- ----- ----- -----					勝手に振舞う
23. 職員に協力的	----- ----- ----- ----- -----					職員に協力的でない
24. 年の割に幼い	----- ----- ----- ----- -----					年の割に大人ばい
25. 施設への適応はよい	----- ----- ----- ----- -----					施設への適応は悪い
26. 施設内の子ども達との人間関係はよい	----- ----- ----- ----- -----					施設内の子ども達との人間関係は悪い
27. 職員との人間関係はよい	----- ----- ----- ----- -----					職員との人間関係は悪い

表3 扱う上での方針

本児を扱う上での方針があれば番号を選んで○印をつけてください(3個以内)

- | | | | |
|------------|-----------|------------|-----------|
| 1. 甘えさせる | 2. やさしくする | 3. 面倒をみる | 4. 話をよく聞く |
| 5. 話しかける | 6. 信頼する | 7. 意志を尊重する | 8. 支持する |
| 9. 方向づけをする | 10. 助言をする | 11. 励ます | 12. ほめる |
| 13. 褒美を与える | 14. 慰める | 15. 注意する | 16. しつける |
| 17. きびしくする | 18. 叱る | 19. 罰を与える | 20. 無視する |

表4 非行・反社会的問題行動

過去において、下記のような非行や反社会的問題行動をしたことがありましたか	1. なかった (歳)	2. あった (何歳頃ですか) 3. 不明
(過去にあった場合) 下記から該当する番号を選んで下さい (重複回答も可)		
現在、下記のような非行や反社会的問題行動をすることがありますか	1. なし	2. あり
(現在ある場合) 下記の中から該当する番号を選んで下さい (重複回答も可)		

(反社会的問題行動の番号) 1. 喫煙 2. 飲酒 3. 嘘言 4. 無断外出 5. 無断外泊 (家出含む) 6. 盛り場徘徊 7. 盗み (乗物盗・万引も含む) 8. 不審な金銭所持 9. 反抗 10. 暴力行為 (傷害も含む) 11. 恐喝・脅迫 12. 不良交友 (非行グループ・暴走族への加入も含む) 13. シンナーなどの薬物遊び 14. 不純異性交友 15. 性的問題 (性的いたずら・わいせつ行為など) 16. 売春 17. その他 (具体的に)

表5 非社会的問題行動

過去において、下記のような非社会的問題行動をしたことがありましたか	1. なかった (歳)	2. あった (何歳頃ですか) 3. 不明
(過去にあった場合) 下記の中から該当する番号を選んで下さい (重複回答も可)		
現在、下記のような非社会的問題行動をすることがありますか	1. なし	2. あり
(現在ある場合) 下記の中から該当する番号を選んで下さい (重複回答も可)		

(非社会的問題行動の番号) 1. 夜尿 2. 遺尿 3. 指しゃぶり 4. 夜驚 5. ねぼけ 6. 自慰・性器いじり 7. チック 8. 自傷行為 9. 場面緘黙 10. 登校拒否 11. 拒食 12. 過食 13. 偏食 14. 逃避的傾向 15. 臆病 16. 強い劣等感 17. 無気力 18. 自閉的傾向 19. ひねくれ 20. 情緒不安定 21. 自殺未遂 22. 神経症 (具体的に) 23. その他 (具体的に)

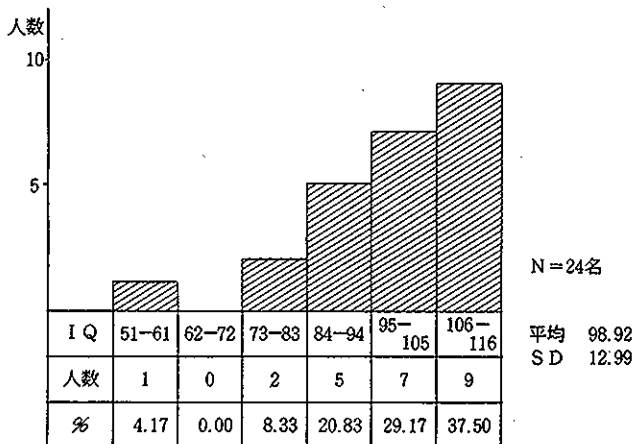


図1 対象児の知能指数の分布

である。

2. 対象児の知能指数

対象児は1名を除き、24名は知能指数が分っている。知能指数の分布は図1で示した。徳島県全養護施設児で算数学力診断テストを行った者188名中、知能指数が分っている者151名の知能指数の平均(102.41でS.D.13.55である)と比較して、大差はなく、平均知能群とみなすことができる。

3. 入所年齢別にみた対象児

対象児につき、養護施設に入所した年齢により、方法の所で述べたように、A, B, C, D 4群に分けて、表6, 7, 8, 9で1986年と1987年度の算数学力診断テストの結果につき、全領域を1986年行った養護施設児の各学年の全領域の平均と比較して、平均との差の項目に年度別に記入した。+は10%以上高い者、±は10%以下プラス、マイナスの者、-は10%以上マイナスの者を表示した。算数評価は各年度の学校での評価を5段階評価2の場合は5分2, 3段階評価で1の場合は3分の1のように記入した。

(1) 入所年齢別からみた知能指数

1986年にテストを1回した者につき、紀要23集で発表した、その後、退所した者など6名を除き検討すると、昨年同様、D群が一番高く、平均は104.9で標準偏差が8.69と一番小さい所から、ばらつきも4群のうちで一番少ない。C群は不明1名を除いて4名でみると、平均86.3と一番低く、標準偏差も一番大きく19.00である。これは㊸が知能指数が58で他児と比較して、一人だけ低いところから、この群の平均知能指数が低くなり、また他児3名の知能指数も90代であるということも他群に比べて低いのだと云える。

(2) 入所年齢別からみた算数学力テストの結果(1986年と1987年との比較)

1986年と1987年の2回算数学力診断テストを行った者について、各群に分けて、表6, 7, 8, 9をみると、1986年の結果一番高いのはA群で+が71.40%で-が28.57%であり、1987年と比較してみると、上がった者は0であった。全体について1986年と1987年の結果とを比較すると、上がった者は3名、変動しない者は18名、下がった者は4名である。

1987年の算数学力診断テストの結果が一番高い群はA群、次はD群で、3番目はC群、4番目はB群であるが各群の人数が少なく、その差は大きくない。

D群について、1986年と1987年の算数学力診断テストの結果とを比較すると、上った者が2名、下った者が1名で1987年の方が多少上っている。施設内での学習指導の効果で

あがってきたとも考えられる。D群は全員小学校に入学してから入所している。入所年齢をみると、平均年齢は8歳7か月、最高9歳3か月、最低7歳0か月である。小学校入学後も家庭で養育されていたということは、措置理由をみると、両親の離婚、両親あるいは片親の蒸発、サラ金に追われて逃げまわり、その結果子どもを施設にあげた。父親による暴力、虐待など、子どもにとっては、安定した環境ではなかったと云えよう。そのため、学校で学習していく課程を十分に習得できずに過してきた子どももあり、その未習得の部分を施設内の学習指導で補っていくことにより、効果があがってきたとも考えられる。第23集で報告したように、㊸、㊹は兄弟であるが措置理由は父親の暴力に耐えかねて母親が家出をした、ということであるが、母親が家出するまでしっかり養育していたので、学校の成績はよいという例もあり、学校就学後に施設に入所した者は、算数科の学力について家庭に於ける養育態度の影響を強く受けるということが云えよう。

(3) 学校の算数科の成績評価

学校に於ける算数科の成績評価を算数学力診断テストを行った同時期 1986年2学期、1987年2学期を表に示した。特殊学級入級児は同学級内の評価であるので除き、5段階評価を一般にやられているように三段階にして4群の平均をみると、A群 1986年 1.6, 1987年 1.9, B群 1986年 1.4, 1987年 1.2, C群 1986年 2.0, 1987年 1.7 D群 1986年 2.0, 1987年 2.0である。A群だけには特殊学級入級者はいない。D群には特殊学級入級者が3名いる。この数値だけで各群の学校での算数科の成績評価を判断することは危険であるが一応の参考としてみた。1986年より1987年の上っている群はA群、変わらない群D群、下った群はB群、C群である。A群は、算数学力診断テストの結果は下っているのに学校の成績評価は上っている。D群は算数学力診断テストの結果は上った者が2名、下った者が1名で上っているが、学校の算数評価は同じである。

算数学力診断テストの結果が+で学校での成績評価が1の者は㊸だけであるが、5分2なので最も低い方ではない。反対に-で1より高い者はいない。

4. 性格特徴

表1で示したような項目に従い各子どもにつき、施設職員に5段階評価をしてもらった。その結果を14甘える一甘えないだけどちらが望しいとも云えないので除き、他の15項目のチェック箇所の数をかけ合計した数を項目数15で割った平均の数を各子どもにつき記入した。(表6, 7, 8, 9参照) 数の小さい方が望ましい性格だと云える。各群とも大きな差はないがC群が一番高く、標準偏

表6 入所年齢 乳児院より入所した者 (A群)

	性別	IQ	1986年度			1987年度			性格	様子	方針	非 行				非 社 会			
			学年	平均との差	算数評価	学年	平均との差	算数評価				現 在		過 去		現 在		過 去	
												有無	番号	有無	番号	有無	番号	有無	番号
4	男	94	中2	+ 19.61 +	3 / 5	中3	+ 41.26 +	3 / 5	2.4	2.6	5, 7, 10	×		×		×		×	
5	男	81	中2	+ 15.93 +	3 / 5	中3	+ 6.26 ±	3 / 5	1.9	2.2	6, 7, 11	×		×		×		○	3
6	男	107	中1	+ 11.14 +	2 / 5	中2	+ 24.23 +	3 / 5	3.0	2.3	4, 10	×		×		×		×	
7	男	105	小6	+ 13.35 +	3 / 5	中1	+ 3.35 ±	3 / 5	2.7	2.5	4, 11, 12	×		○	7	×		○	16, 19
8	男	114	小5	+ 40.07 +	3 / 5	小6	+ 36.75 +	4 / 5	3.1	3.2	5, 11, 12	×		×		×		×	
9	女	106	小3	- 22.30 -	2 / 5	小4	- 13.43 -	2 / 5	2.5	2.2	4, 9, 11	×		×		×		○	3
10	男	101	小2	- 19.68 -	1 / 3	小3	- 26.46 -	1 / 5	3.1	2.6	2, 5, 12	×		×		×		×	
	平均	101.1	4, 5は高校進学						平均	2.67	2.51								
	SD	10.76							SD	0.44	0.35								

× = 無
○ = 有

上がった者 - 0, 変動なし + → + ... 3, - → - ... 2 計5, 下がった者 + → ± 2

表7 入所年齢 3歳0月以下で入所した者 (B群)

	性別	IQ	1986年度			1987年度			性格	様子	方針	非 行				非 社 会			
			学年	平均との差	算数評価	学年	平均との差	算数評価				現 在		過 去		現 在		過 去	
												有無	番号	有無	番号	有無	番号	有無	番号
12	男	81	中2	- 9.47 ±	3 / 5	中3	+ 22.26 +	3 / 5	2.6	2.5	4, 7, 11	×		×		×		×	
13	女	93	中1	+ 2.75 ±	2 / 5	中2	+ 9.23 ±	2 / 5	2.7	2.6	2, 4, 6	×		×		×		×	
14	女	96	小4	- 1.84 ±	2 / 5	小5	- 14.43 -	2 / 5	2.4	2.2	2, 4, 6	×		×		×		×	
15	女	94	小3*	- 34.56 -	3 / 5	小4*	- 12.43 -	3 / 5	3.2	3.1	4, 9, 10	×		×		×		×	
16	男	108	小3	+ 18.94 +	3 / 5	小4	+ 29.57 +	2 / 5	3.5	2.7	4, 9, 15	×		×		○	1	○	1
17	男	115	小2	- 7.88 ±	1 / 3	小3	+ 2.54 ±	2 / 5	2.7	2.8	1, 11, 12	×		○	7	×		×	
	平均	97.8	12は高校進学, *は特殊学級						平均	2.85	2.65								
	SD	12.02							SD	0.41	0.30								

× = 無
○ = 有

上がった者 ± → + ... 1, 変動なし + → + ... 1, - → - ... 1, ± → ± ... 2 計4

下がった者 ± → - ... 1

表8 入所年齢 3歳1月-6歳以下で入所した者(C群)

	性別	IQ	1986年度			1987年度			性格	様子	方針	非 行				非 社 会			
			学年	平均との差	算数評価	学年	平均との差	算数評価				現 在		過 去		現 在		過 去	
												有無	番号	有無	番号	有無	番号	有無	番号
18	女	95	中2	+ 2.23 ±	3 / 5	中3	+ 9.26 ±	2 / 5	2.8	2.9	5, 6, 11	×		○	7	×		×	
20	男	99	小3*	- 26.46 -	1 / 5	小4*	- 22.43 -	1 / 5	3.4	2.5	2, 4, 12	×		○	7	×		○	1, 2
21	男	93	小2	+ 16.12 +	2 / 3	小3	+ 20.54 +	3 / 5	3.1	3.0	9, 11	×		×		×		○	5
22	男	不明	小2	+ 14.12 +	2 / 3	小3	+ 27.54 +	3 / 5	2.6	2.0	4, 7, 12	×		×		×		×	
23	女	58	小1*	- 42.17 -	1 / 3	小2*	- 63.28 -	1 / 3	3.3	3.0	3, 4, 5	×		×		×		×	
	平均	86.3								3.04	2.68								
	S D	19.00	18は高校進学, *は特殊学級							0.34	0.43	× = 無 ○ = 有							

上がった者-0, 変動なし+→+…2, ±→±…1, --→--…2 計5, 下がった者-0

表9 入所年齢 6歳1月以上で入所した者(D群)

	性別	IQ	1986年度			1987年度			性格	様子	方針	非 行				非 社 会			
			学年	平均との差	算数評価	学年	平均との差	算数評価				現 在		過 去		現 在		過 去	
												有無	番号	有無	番号	有無	番号	有無	番号
24	男	110	中1	- 19.45 -	2 / 5	中2	- 3.77 ±	2 / 5	3.3	2.4	10, 11, 15	×		×		×		×	
25	男	95	小6*	- 22.25 -	1 / 5	中1*	- 36.65 -	1 / 5	3.4	2.5	5, 15, 16	×		×		×		×	
26	女	94	小5*	- 9.73 ±	2 / 5	小6*	- 15.25 -	2 / 5	2.9	2.9	4, 9, 12	×		×		○	3	○	3
27	男	114	小5	+ 44.37 +	4 / 5	小6	+ 24.75 +	3 / 5	2.4	2.3	5, 6, 11	×		×		×		×	
29	男	114	小3	+ 27.84 +	3 / 5	小4	+ 32.57 +	4 / 5	1.7	1.7	4, 6, 7	×		×		×		×	
30	男	108	小3	+ 9.84 ±	3 / 5	小4	+ 32.57 +	3 / 5	2.5	2.5	4, 12, 15	×		×		×		×	
31	女	99	小2*	- 11.88 -	1 / 3	小3*	- 18.46 -	2 / 5	2.9	2.9	4, 10, 15	×		×		×		×	
	平均	104.9								2.73	2.46								
	S D	8.69	*は特殊学級							0.58	0.41	× = 無 ○ = 有							

上がった者±→+…1, --→±…1 計2, 変動なし+→+…2, --→--…2 計4
下がった者±→--…1

差が一番小さいので各子どもの差はない。B群、D群、A群の順で、A群が一番小さい数であった。云い換えれば、望ましい性格傾向である。

5. 施設内での行動特徴

表2で示したような項目に従い各子どもにつき、施設職員に5段階評定をしてもらった。24年より幼い一年より大人っぽいのは、どちらが望ましい性格とも云えないので除き、10項目のチェック箇所の数をかけ、合計した数を項目数で割った平均の数を各子どもにつき記入した。(表6, 7, 8, 9参照)数の小さい方が望ましい行動と云える。各群とも大差はない。一番高いのが⑧の3.2である。⑧については後述の事例研究を参考にされたい。⑨は性格、行動ともに1.7で対象児の中で一番低く、望ましい状態であると云える。(3)の学校の成績評価の項で述べたように、母親が家出する迄、しっかり育てていたということであるが、職員の話では、扱いやすく、性格もよく、自分の判断で行動できる子どもだということである。

6. 各施設児を扱う上での方針

各施設児を職員が扱う方針につき、20項目をあげて3項目だけ選んでもらった(表3参照)ものを各対象児の欄に記入した。表6, 7, 8, 9参照。これを見ると(4)話をよく聞くが第1位 15(20.54%) 第2位(10)助言する 10(13.70%) 第3位(12)ほめる 9(12.33%)であった。この施設では、話をよく聞いて、助言し、ほめるという方針で子どもを扱っていることが多いと云えよう。

7. 非行・反社会的問題行動

非行・反社会的問題行動が過去にあったか、ないか、現在あるかないかを各対象児について、職員に記入してもらった(表4参照)表6, 7, 8, 9に示したその結果をみると、現在ある者は1人もいない。過去にあった者が4名で、すべて7.盗み(乗物盗、万引を含む)であった。内訳をみると、C群 2名、A・B群各1名、D群0名であった。この結果から現在非行・反社会的行動を示している者はいないということが云える。

8. 非社会的問題行動

非社会的問題行動が過去にあったか、ないか、現在あるかないかを各対象児について、職員に記入してもらった(表5参照)。表6, 7, 8, 9に示した。その結果をみると現在ある者は2名で、⑬が夜尿(B群)、⑭の指しゃぶり(D群)である。過去にあった者は、⑤⑨が指しゃぶり⑦に強い劣等感とひねくれであった(A群)。⑫に夜尿・遺尿があった(C群)。⑯が夜尿、これは前にあげたように現在もある(B群)。⑳にねばけ(C群)㉑

指しゃぶり、これは現在も続いている(D群)。過去にあった者はA群に3名で一番多い。乳児院から入った子どもで、施設に早くから入っているため小さい頃の状態が把握されているとも考えられる。

9. 岸本裕史氏の方法による学習指導

この施設では、施設主事のK氏が岸本氏の講演を聞き、学校の落ちこぼれの子どものための指導の方法など大いに参考になると考えて、1986年11月10日から実施し、小・中学生全員とし、100問計算を1課程(10参照)だけやらせた。時間帯は1時間の学習時間の最初を使い、終わっても宿題なり自分の勉強をするということにした。計算の方法の珍しさもあってか、居合わせた職員が驚いて顔を見合わせる程の静かさで取組んでいた。「この学習方法をうまく使っていけば何とかなる」と思ったという。早い子どもは1分40秒前後ですませた。特殊学級の小学生は両手の指を広げて一つ一つ計算していくので30分~1時間かけて、それでも熱心に仕上げた。(この子どもでも1か月後12~13分、1987年9月頃には4、5分で

表10 岸本式学習法 100問足し算形式

＜足し算＞

+	4	5	7	9	1	8	0	6	2	3
4	8	9	11				
5	9	10	12				
7	11	12	14				
9	:	:	:							
1	:	:	:							
8	:	:	:							
0	:	:	:							
6										
2										
3										

完答するようになった。)その後、学習方法を工夫し、岸本氏の学年別「計算習熟プリント」を使って学習指導を続けている。K氏の考えは、この学習方法自体が成績を今すぐ向上させるためのものではなく、いわゆる集中力をつけ、それが授業中の態度、スポーツへの取り組み方、そして生活全般へと影響していくものだという考えである。

㉒ この子は性格が前から暗く、消極的であったが、100問計算も12~13分かかっていたが、100問計算が2分余りで出来るようになり、今でも特殊学級ではあるが性格も明るくなったような気がする。職員もいろいろ苦労はあるが、テストをしている途中での叱り方、ほめ方

など勉強することが多い。子どもたちがテストでの目標を達成できた時の、あの笑顔を見ると、「この学習方法をやってきて良かった。」とつくづく感じるとのことである。このように子どもたちに「勉強は全く駄目だ」という気持ちから「自分もやればできるのだ」という気持ちを持たせたということは、K氏が指摘したように子どもの将来にとってよい影響を与えると思うので息の長い努力を望み、次の1年後の結果に期待したい。

11. 事例研究

㊦ 男 中学1年 第23集で報告したが、知能指数が95あるのに特殊学級に入っている。1986年、1987年とも算数学力診断テストは0%であった。1986年に行った佐野氏案の学習障害原因的分類チェックで、E視覚、聴力のチェック、G情緒障害型、H学習習慣不確立型が要注意であった。1957年行った性格特徴で「暗い」「意志が弱い」「だらしがない」「やる気がない」「感情表現に乏しい」が5の段階の非常に、望ましくない状態にチェックされている。15項目の平均は3.4であった。施設での様子は「リーダーシップがとれない」が非常に5段階にチェックされ、10項目の平均は2.5であった。施設での本児を扱う方針は、話しかける、注意する、しつけるで、注意し、しつける段階なのだと考えられる。非行・反社会的行動、非社会的行動とも過去、現在ともないテスト結果が0であったので、3年生用の算数学力診断テストをやってみた結果は、数と計算 44.4%、量と測定 50%、図形 28.6%、数量関係 28.6%、全領域 37.5%であった。これは徳島県養護施設児4年生の全領域平均 34.43%（1年下のをしている）と比較してほぼ同じである。9歳3か月で入所し、措置理由は父が酒を飲んで暴力をふるうため、母親が家出をしたということである。入所までの環境が悪く、勉強どころではない環境で育てられたわけであるが、3年生が37.5%出来ていることから、落ちていた所を根気よく指導していけば、だんだんに学力がついていくのではないだろうか。日常生活に必要な算数の学力を獲得し、社会にでて仕事につけるようにしたいものである。

㊧ 知能指数81であるが、1986年に全領域で平均より高く、学校の成績もよく、知能指数が81よりもっとよいのではないかと施設職員もみていたが、高校に進学し、勉強に励んでいるということである。

㊨ 男 小6 算数学力診断テストの結果、全領域 1986年 + 40.07 1987年 + 36.75 と高く、学校での算数評価も1986年 3/5、1987年 4/3 で高い。知能指数は114である。学業不振ではないが、施設内でする学習指導を熱心に行わないというので取り上げてみた。措置理由

は両親調停離婚、親権者父となり、父方祖母に引き取られるが、祖母が病弱になり養育困難なため乳児院に入り、2才4か月時措置変更で入所した。友達との関係はよく、交友関係も広いが、職員に対しては協力的でない。職員が性格特徴を評定した結果は、「暗い」「強情である」「だらしがない」「やる気がない」「気分がかわりやすい」「感情表現が乏しい」「甘えない」が4段階にチェックされているが、「非常にがまん強い」という点もある。施設内の様子では、「リーダーシップがとれない」「勝手に振舞う」が4段階にチェックされている。施設職員が本児を扱う方針として「話しかける」「励ます」「ほめる」があげられている。非行及び反社会的問題行動、非社会的問題行動とも過去、現在にない。知能指数が施設児の中で高い方である（115が1名114名が2名いる。）学校の算数評価も5段階評価の4でよい点から、単純な算数課題だと、却ってやる気をなくしてしまうのではないだろうか、他の子どもより高い程度の学習をさせていくことがこの子のやる気を起させることにはなるのではないかと考えられる。

㊩ 女 小学3年 第23集で取上げたが、知能指数が94であるのに、足の手術をして入院したため、欠席が長くなったなどで学業不振になり、特殊学級に入級している。その後の変化を追ってみた。算数学力診断テストの結果は表11で示したように、1986年小学3年時より1987

表11 ㊩の算数学力診断テストの結果

学年	数と計算	量と測定	図形	数と計算	全領域
小学3年	28.6%	11.1%	0%	0%	9.9%
小学4年	50.0%	30.0%	0%	7.0%	22.0%

年小学4年時の方が上ってきている。特に数と計算、量と測定は上っている。措置理由は両親の離婚により、母親が親権者になるが養育能力に乏しいため、2歳6ヶ月で入所している。性格特徴は「暗い」「物事を気にしすぎる」「感情表現が乏しい」「甘えない」が4段階にチェックされ、後の項目は3段階である。施設内の様子は「リーダーシップがとれない」が4段階にチェックされている。後の項目は3段階である。施設職員が本児を扱う方針については「話をよく聞く」「方向づけをする」「助言する」である。非行及び反社会的行動、非社会的行動の何れも過去・現在ともない。以上の結果から、少し暗く、物事を気にし、感情表現が乏しいという消極的な性格のように判断できるが、そのため施設での本児を扱う方針が話をよく聞いて、方向づけや助言をして、

本児が行動していけるようにと扱っていると思われる。学校での様子は、清掃は友達と協力して、先生がだまっ
ていてもきちんとできるなど、積極的行動がみられるよ
うになってきたということである。施設内の学習指導に
も積極的に取組むようになり、だんだん遅れを取り戻し
てきている。

V おわりに

1986年に引続き、1 養護施設の子どもの算数学力診
断テストを行い、その結果を比較検討するとともに、対
象児の性格特徴、施設内の様子、職員が対象児を扱う方
針及び、非行及び反社会的問題行動、非社会的問題行動
が過去、現在に有、無など職員に記入してもらうととも
に、学校に於ける算数科の成績評価などを加えて、各対
象児につき、その特徴を把握した。施設内で岸本氏の方
法により、1986年にテストを行った後から、算数科の学習
指導を対象児に対して行ってきている。1986年と1987年
の算数学力診断テストの結果に大きな変化をしている者
はいないが、施設内で実際に指導に当たられた。主事の
K氏が学習指導を行ってきた感想を次のように述べてい
る。「この学習方法自体は今すぐ成績を上昇させるもの
ではなく、集中力をつけ、それが授業中の態度など生活
全体によい影響を与えるものである。目先の変化にとら
われないで、根気強く、指導していくことが必要であら
う」K氏の感想は学習指導を行っている者として共感す
ることである。一旦、学業不振になると、特に算数科は
足し算、引き算ができないと、掛け算、割り算が出来な
いということになり、理解できていないことがあると、
雪だるま式に出来ないことが多くなってしまふ。そして
他の子ども達はどんどん先の課程に進んでいくので、だ
んだんに自信を失ない、勉強意欲をなくしてしまうこと
になる恐れがある。算数学力診断テストは未習得部分
を見出すこともできるので、それを利用して、未習得部分
を発見して、学年にかかわらず、その部分を補ってやるこ

とが算数科の学業不振改善には有効であると考えている。
養護施設に小学校入学後に入所した子どもは、措置され
るまでの生活環境を考えると、算数科の学習課程で未習
得部分が生じていることが考えられる。養護施設児の学
業不振の改善を行う上には、その点も考慮する必要がある。
本施設の職員の子どもに対して、目の前の効果だけ
を追わず、根気よい指導に敬意を表したい。

(本研究はプロジェクト研究で行った、学業不振の実態
と改善に関する研究の一環として行ったもので、プロジ
ェクトの研究者の方々と徳島児童相談所 森依願氏、資
料を提供して下さった施設の職員の方々に深く感謝する。)

参考文献

1. 権平俊子他「情緒障害児等の学業不振に関する研究」
日本総合愛育研究所 紀要 第14集 123 - 127 頁
1987年
2. 権平俊子他「情緒障害児等の学業不振に関する研究」
養護施設入所児の事例研究 日本総合愛育研究所 紀
要 第23集 295 - 301 頁 1987年
6. 平田憲隆「学業不振児対策と学習指導の実践」児童
養護 第19巻 第1号 44-47頁 1988年7月 全社
協養護施設協議会
7. 岸本裕史 計算の力をきたえる。講座 岸本裕史の
教育方法3 1987年5月 部落問題研究所出版部
8. 岸本裕史・藤原義隆監修 学力づくりの基礎 基本
1987年8月 あゆみ出版
9. 岸本裕史 学力づくりの教育方法 講座 岸本裕史
の教育方法1 1987年5月 部落問題研究所出版部
10. 佐野良五郎 学業不振児 1978年3月 校成出版社
11. 徳島県児童相談所「徳島県における養護施設児の実
態」1985年3月 業務概要 51-70頁 1985年
12. 徳島県児童相談所「養護施設児の学業不振児の原因
と対策に関する研究」1987年3月
13. 徳島県児童相談所「徳島県養護施設における学習指
導に関する実践研究の中間報告」1988年3月

Research on Underachievement of Children
in a Home of neglected and abused children (2)

—A case study of children in a home of neglected and abused children—

Toshiko GONDAIRA

In the previous report, I conducted the mathematics ability test in a home of neglected and abused children at Tokushima Prefecture at 1986, then classified children into 4 categories by the age of admission to "home": (A) transferred from an infant home, (B) under 3 years old, (C) from 2 years old to 6 years old, and (D) over 6 years old. I carried out a research of their underachievement specially emphasizing on mathematics. In 1987, I had conducted mathematics ability test based on the same criteria on the same children: 6 of elementary school, 9 of middle high school. (male:17, female:8)

- 1) We had the IQ score of 24 children. The average is 98.92. S.D. is 12.99. They are assumed to be normal I.Q. group.
- 2) We compared the result of 1987 testing with the 1986 result: to facilitate the comparison, we divided children into three groups based on the 1987 score; group that shows over 10% of improvement from 1986 score, group within +10% of 1986 score, and group that shows over 10% of deterioration.

In group A, there are 0 of score improvement, 2 of no significant score change, and 2 of score deterioration. In group B, there are 2 of improvement, 4 of no significant change, and 0 of deterioration. In group C, there are 0 of improvement, 5 of no significant change, and 0 of deterioration. In group D, 2 of improvement, 4 of no significant change, 1 of deterioration.

- 3) When I compared the grade of mathematics given from school, group A shows improvement, group D shows no significant change, group B & C shows deterioration.
- 4) I asked the "home" staff to evaluate the characteristics of each subject. The evaluation of group A, B, & C is almost same. However there are slightly undesirable traits on group C. Also there are undesirable traits on group with score deterioration. However, I cannot find any significant difference between 3 groups: i.e. group with score improvement, group with no significant score change, and group with score deterioration.
- 5) There are not so much difference of attitude among staffs in treating children: hearing, advice, and praising are the main methods.
- 6) There are no children causing the problem of misdeed or antisocial actions. The number of children with the history of misdeed or antisocial actions are: 0 from D group, 1 from A group, 1 from B group, 2 from C group. 3 of them are of the group with no significant score change. 1 is of the group with score deterioration.
- 7) The number of children with behavior that would not conform with social norms are: 1 from group B and 1 from group D; 1 from the group with score improvement and one from the group with no significant score change. The number of children with the history of behaviors that would not conform with social norms are: 3 from group A, 2 from group C, 1 from group B and 1 from group D; 2 from the group with score improvement, 2 from the group with no significant score change, and 2 from the group of score deterioration.